

# 国際協力の失敗とアメリカの責任

ジェフリー・サックス（米コロンビア大学教授）

世界的に著名な経済学者で米コロンビア大学のジェフリー・サックス教授が、広島大学の「平和と持続可能性についての2022 ヒロシマ国際会議」（3月1 - 4日）で講演しました。教授はこのなかで、ウクライナ戦争やコロナ禍の広がり、米中対立など6つの分野をとりあげて、必要とされている国際的な協調と協力が行われていない主要な要因は、アメリカによる傲慢な世界優位の追求にあると批判しました。以下は講演の全文起こしです。（中見出しは翻訳者）

## 悲惨な状況は国際的な協力の欠如が原因

本日は、このような会合にご招待をいただいたことに感謝し、広島大学と「平和に関する教育・研究ネットワーク」のみなさんの素晴らしい活動に敬意を表します。私たちは、これまで以上に、平和に関する教育と研究のためのネットワークを必要としています。地球上の平和への挑戦に失敗しているからです。この会議が計画された時よりも今ははるかに悲惨な状況にあります。

この会議が設定されたとき、私は持続可能な開発目標や持続可能性の課題につ

いて話すことにわくわくしていました。しかし、ヨーロッパで大規模な戦争が起こりました。第二次世界大戦以来の大規模なものです。核保有国同士の対決のリスクもあります。このような危険な状況になるとは夢にも思っていませんでした。まさに恐ろしい時代になりました。

私はちょうど、プレティン オブ アトミック・サイエンティストの「終末時計」を見たところです。広島と長崎の惨劇の後、核戦争の危険性について世界に警告を与えるために設立されたものです。この終末時計によると、私たちはいま第二次世界大戦後の歴史の中で、真夜中（終末）に最も近いところにいます。真夜中まで 100 秒、2 分未満としているのです。しかし、あえて言えば、ここ数日の出来事によって時計の針はさらにすすんで真夜中に近づくことはほぼ間違いないでしょう。

私たちの時代で否定できない事実は、必要とされる世界的な協力関係ができていないことです。実際、私たちは大国間抗争の時代に逆戻りしています。同盟は、世界の安定を生み出さないどころか、ますます全面戦争、世界大戦の危険を生み出しています。いまの核時代には、すべてが終わる可能性があります。共通の利益という最も基本的な点での協力の失敗の連鎖が、現代の衝撃的とも

いえる事実なのです。

私は、この世界的な協力の失敗を 6 つの分野について簡単に説明したいと思います。これらすべては、地球上の生存を脅かすものであり、外交の重大な失敗を示すものです。これはまたすべての政府に正気を取り戻すよう促すシグナルです。あれこれの政府の問題ではありません。なぜなら、各国政府が効果的に連携しておらず、国連システムの中で良識と平和のために設定した目標や基準に従って行動していないからです。

### **ウクライナ戦争の背景とアメリカの責任**

まず、ウクライナからお話しします。もちろんこれは悲劇であり、大惨事です。民間人や主要な都市部が砲撃され、すでに 100 万人の難民が発生しています。ここ数日の事態は、ロシアがやっているようなものでは決してなく、まさに悲惨な状況です。しかし、私たちはこの紛争の背景とこの間の変化を理解する必要があります。30 年前、新たな協力がうまれました。世界を繰り返し脅かしてきた冷戦が終わり、平和の時代を作る新しい世界の安全保障構造を作る道が開かれたようにみえました。

私は、末期のソ連に関わり、ゴルバチョフ政権の経済チームに協力しました。

1992年に、独立したばかりのロシアでエリツィン新政権に関わり、1993年と

1994年には、短期間ですがウクライナのクチマ大統領にアドバイスをしました。

ですから、私は知っています。この時期に、何世代にもわたる平和を築くこと

ができたのではないかと個人的には思っています。

それがどうなったのでしょうか。私は、失敗の主な責任はアメリカにあると思

います。アメリカは当時の可能性を十分に生かそうとしませんでした。ソ連は経

済的に破綻し、独立したばかりのロシアをはじめ、旧ソ連の14カ国は、経済危

機でした。しかし、外部からの援助や同情、共感、財政支援が必要な時に、ア

メリカとアメリカの同盟国からの援助は得られなかったのです。

ロシアの経済危機は非常に深く、社会は混乱していました。こういう時にこそ、

援助とグローバルな協力によって、協力と相互理解の道があることを示すこと

が不可欠だったのです。しかし、当時のアメリカ政府は、この時期をアメリカ

の勝利とみなしていたのではないかと思います。アメリカ政府や外交当局者の

多くは、ロシアは弱体化してアメリカに対抗することはとうていできない、だ

から今こそアメリカがやりたいことをやれるときだと考えていたのでしょうか。

アメリカが行ったことのひとつは、1990年に交わしたソ連との約束に反して、NATO 軍事同盟を東に拡大することでした。そういう約束がなされたかどうかについて疑問があるかもしれませんが、慎重な歴史家たちは明確に証明しています。アメリカやドイツなどはドイツが統一しても NATO の東方への拡大はないとソ連の指導者に約束したていました。

彼らは嘘をつき欺いたのです。1990年代半ばにはクリントン大統領が米軍事同盟を中・東欧に拡大し始めました。ブッシュ大統領が就任すると、同盟構想はバルト3国まで拡大されました。さらにブッシュ大統領は2002年に ABM 条約から一方的に離脱しました。NATO が1999年にロシアの同盟国であるセルビアを空爆したこともロシアを驚かせました。NATO がロシアとの協議なしに力を展開し、ロシアへの直接的な脅威となり得ることを示したからです。

次にきたのが、2001年のアメリカによるアフガン侵攻と2003年のイラク戦争でした。2008年、ロシアの猛反対を押し切ってウクライナとグルジアに NATO 加盟の招待をしました。2011年にアメリカはシリアのアサド政権打倒を企て、同じ年、リビアを空爆しました。そして2014年にウクライナで（親西欧勢力

を) 支援をして親ロシア政権を転覆させたのです。

あれこれ指摘しましたが、私の考えでは、アメリカのこれらの措置はすべて挑発的でした。NATO は一步一步にロシアを包囲していくということをプーチンに示したのです。プーチンは昨年、NATO にウクライナ進出をしないよう要求しました。アメリカはその要求を無視しました。その際アメリカは(どの国にも) NATO 加盟の選択肢があると言いましたが、これはつまり、アメリカにはウクライナに進出する権利がある、アメリカの軍事同盟はロシアの国境近くまで拡大することができるという主張なのです。

ですから私は、ウクライナで行われている人道に対する罪について、プーチンとロシアを免責したり、免罪したりするつもりは全くありませんし、現在の惨状を招いた先行原因があると言うつもりはありません。しかしその重要な原因の一つは、ソ連やロシアの安全保障上の懸念に耳を貸さず、30年間もそれを嘲り、無視してきたアメリカの深い傲慢さだったのです。。実際、今まで、そして今、ウクライナの人々が恐ろしい代償を払っているのに、エスカレーションから抜け出していないのです。また直接対決の危険から脱したわけでもありません。私は、この危機の主要な部分として、アメリカ外交の失敗を指摘している

のです。こういうことをいうとアメリカではとても不評です。記憶もされませんし、主要メディアでとりあげられることもありません。しかし、この悲惨な事態には我々に重要な責任があるのです。

### **コロナ対策の協力を背に向けた**

もう一つの分野、新型コロナ・パンデミックについて簡単に説明しましょう。このパンデミックにより、世界中で 1500 万人以上が死亡しています。この恐ろしい結果は、国際協力の失敗の反映でもあります。というのも、このパンデミックが発生したとき、病気を食い止めるチャンスは、国境を越えた感染の阻止、制御努力の同期化、PPE 機器、医薬品、病院設備などの重要物資の共有といった政府間の協力にかかっていたからです。ワクチンの開発もすべての国が利用できるようにするかどうかにかかっていた。しかし、このような協力は全く行われませんでした。

今回のパンデミックとのたたかいは、ほぼ完全に国単位で行われています。強力な対策をとっている国もあれば、ほとんど対策をとっていない国もあります。しかし、ほとんど協力がないうまま、パンデミックの最初の年に、またもやアメリカがひどい役割を果たしました。トランプ大統領の関心は、グローバルな協

力よりも、自分の再選や中国攻撃でした。選挙戦では、中国を批判し、世界保健機関（WHO）も中国の手中にあるとあって攻撃し、世界中の（対策の）調整を担う中核機関を弱体化させてしまいました。私たちはそのチャンスを失い、今日に至るまで、アメリカ、中国、ロシア、ヨーロッパ、インド、イギリスの当局者たち、ワクチンを製造する国々は、ワクチンの普遍的な適用を確保する方法について協力をしてきませんでした。

例えば、アフリカの国々の予防接種を支援する際に、世界共通のニーズであるこの問題で技術協力が行われませんでした。これは私にはショッキングなことです。それは、寛大さだけの問題でもなければ、根本問題でもありません。世界共通の利益の問題なのです。新たな変異株がでて世界に広がらないようにするには、世界のすべての地域が必要な保護を受けられるようにする必要があります。今回のパンデミックは、世界が最低限の協力関係さえ築けなかったことを物語っています。繰り返しになりますが、私はアメリカがこの世界外交の中心的存在だと思っています。

### **米中の緊張激化の原因は**

協力が失敗した3つ目の分野として、私は米中関係を挙げたいと思います。こ

これは明らかに日本や東アジアにとって直接的な懸念事項ですが、世界全体にとってもそうです。米中間の緊張の高まりは、しばしば中国の挑発行為に起因すると言われます。しかし、これはあまりに単純な説明だと思います。いまおきている緊張のエスカレーションでは、世界で最も強力な 2 つの国、アメリカと中国がお互いに話し合っていないからです。この 7、8 年間、米中関係の悪化を見てきました。もう一度言いますが、その原因の大部分は中国ではなく、アメリカの行動にあると思います。

アメリカは中国の経済的、技術的成功をなかなか受け入れようとしません。しかしこれは国家的な成功であると同時に人類の成功なのです。中国が成し遂げたことは、日本が明治維新から第二次世界大戦後までずっと培ってきた教訓と戦略によるものです。池田首相のもとでの 10 年間の発展で、日本の所得は 2 倍になりました。中国はその道を踏襲し、40 年の急速な経済発展で 10 億人を貧困から救出しました。私たちはこの成果を中国の大成功として賞賛すべきです。それは人類にとっても大きな成功です。

ところがアメリカでは、それがアメリカの覇権と優位性への直接的な脅威と見なされるようになりました。これはアメリカが多くのパワーの 1 つであること

に満足できないからです。アメリカは最強であることに固執しています。中国の台頭は成功ではなく、脅威と見なされたのです。すでに数年前からアメリカは中国封じ込めのキャンペーンを始め、テクノロジー分野での中国の成功を破滅させようとしています。安全保障上のリスクがあるといってファーウェイのような中国企業を潰そうとしています。私にいわせれば、これはまったく検証されていない告発です。その目的は中国の技術的な進歩を食い止めることでした。今年、バイデン大統領の下でこうした措置はさらに強化され、たとえば5Gシステムに必要な高度なマイクロチップの輸出を実際に停止しました。これらの措置は、平和を助長するものではなく、一種の経済戦争であり、非常に危険なことです。

また、アメリカは1970年代の米中関係正常化まで遡る「一つの中国」政策の基本合意について、さらに挑発的な行動をとっています。バイデン政権は、あらゆる機会をとらえて台湾との緊密な関係を演出しています。あれこれの場面や機関に当然のように台湾の参加を求めています。これは中国に対するあからさまな挑発であり、不必要な挑発です。それでいてなぜ緊張が高まっているのか不思議だということです。安全を確保しようとするなら、このような挑発行為を止める必要があると私は思います。今、ウクライナの紛争で、中国がアメ

リカの制裁に加わるかどうか注目していますが、中国が加わらないとしたら、制裁は中国にいくのでしょうか。その場合、対立の戦線はどれだけ広がるのでしょうか。私たちは本当に挑発したいのでしょうか。世界の安全にとって大きな問いだと思います。

### **気候変動への取り組みでの失敗**

協力が失敗した 4 つ目の分野は、気候変動です。今年は、気候変動に関する国連枠組み条約から 30 周年にあたります。条約は、気候への危険な人為的干渉を防ぐために、温室効果ガスの濃度を安定させることを求めました。濃度を安定させるとは、温室効果ガスの排出を止めるか、あるいは非常に低いレベルにまで下げることです。しかし私たちは、排出をゼロに近づけるどころか、年々の増加を止めることさえできていません。二酸化炭素、一酸化二窒素、メタンの排出量は、国連枠組み条約から 30 年経っても毎年増え続けているのです。

1997 年の京都議定書は、アメリカにとって予想外のものであったことを思い出してほしいと思います。そこで離脱したのです。そして 1987 年から 18 年かけてパリで新たな合意に至りましたが、その直後、トランプ大統領が選出され、パリ協定から脱退しました。つまり、再び協力がとてつもなく大きな失敗にな

ったのです。そして今、温暖化によって地球の温度が 10 万年来の高さになり、文明の全期間よりも高温になり、温暖化率が 10 年あたり 0.3 を超えました。今後数年以内に 1.5 の敷居を超える可能性が非常に高いことを意味しています。

干ばつ、洪水、熱波、海水面の上昇、大規模な暴風雨の増加の危険にさらされています。先日発表された IPCC の報告書では、これらの前例のない被害が強度と頻度を増して発生していることが強調され、1.5 を超えると、連鎖的に被害が発生する可能性があるという警告をしています。

アメリカを見てみると、国連枠組み条約を批准して以来、連邦議会の上院は 30 年間、気候変動に関する主要な法案に一度も賛成票を投じていないのです。これは茶番です。アメリカの政治が腐敗しているからです。石炭、石油、ガスの力を背景に、上院のエネルギー天然資源委員会の委員長は、石炭会社を 2 社所有している上院議員です。そして彼は世界の利益よりも国益を政府は取ると述べているのです。

## **国際金融での不平等**

5 つ目の分野として挙げたいのは、開発、金融です。パンデミック以来、高所得国は緊急支出を賄うために、政府の赤字によって途方もない額の借金をしました。何十億ドルもの追加財政支出です。しかし、貧しい国々は金融にアクセスできないため、支出を削減せざるを得ませんでした。

例えば、日本は政府がゼロ金利に近い政策で、アメリカは 2% 以下です。ヨーロッパでも、ほぼゼロ金利です。しかし、エジプトやパキスタン、ガーナ、ナイジェリアといった国はどうでしょうか。豊かな世界と同じような借入条件を利用することはできません。大変な不平等があるのです。豊かな世界は財政支出を拡大して国民を保護し、経済を回復させることができましたが、世界の最貧国はこのパンデミックに見舞われ、持続可能な開発を達成するためのセーフティネットに必要な資金を確保することができないでいるのです。

国連は 17 の持続可能な開発目標を掲げています。我々はそれらの目標を達成するためにグローバルなパートナーシップを約束しています。しかし明らかに国際金融システムは失敗しました。低所得国や低中所得国は、教育や医療への普遍的アクセス、電化を含む基本的なエネルギーサービスへの普遍的アクセス、安全な水と衛生への普遍的アクセスといった基本的な基準を達成するのに必要

な資金の流れを政府が提供できないでいるのです。このような資金への不平等なアクセスは、本当に心が痛むものです。

豊かな国々はそれに取り組もうとはしません。混乱、貧困、不平等の拡大、緊張の高まり、気候変動への資金の提供は途上国向けに 1000 億ドルに達するはずだったのに、その基本的な約束すら果たせず、遠く及ばない状況です。そして、繰り返しになりますが、アメリカは国内政治でこのことに全く注意を払っていないのです。

### **核軍縮に後ろ向き**

最後の 6 つ目に、協力がうまくいっていない分野は、この会議の意味と広島大学、平和教育研究ネットワークのリーダーシップに最も近いもので、核軍縮に関する協力です。私たちは今、核保有国間の緊張の高まりの真ただ中にいますが、それだけでなく、アメリカは核（軍縮・管理）条約から手を引き、新世代の核兵器に巨額の支出をしているのです。ご承知のように中国も核兵器を増強しているますが、その弾頭数は米国やロシアに比べればはるかに少数です。

ロシアも核弾頭を近代化していますが、過去 20 年間、核拡散が急速に進んだの

は、アメリカが到達した協定を守らず、北朝鮮との合意を追求しなかったからです。イランとの協定は、また発効するかもしれませんが、土壇場でそうなるだけで、今日のニュースでは、イランは核兵器製造を開始するのに十分な量の強化ウランを保有するところまで来たと報道されています。アメリカはイランと条約を結んだのに、再び合意から離脱しました。そのことで国際的な合意においてもアメリカは全く信頼できない相手であることを示しました。

近年、米国が脱退した、あるいは批准しなかった協定の数を加えれば、ABM 条約からの脱退、パンデミックの最中の世界保健機関からの脱退、パリ協定からの脱退、イラン協定からの脱退など、多岐にわたります。これらはすべて、我が国が国際協力の最も基本的なテストに失敗していることを示しています。なぜなのか。それはアメリカがパートナーシップや真の法の支配ではなく、ごう慢にも世界的な優位を追い求めているからです。

私たちは終末（ドゥームズ・デイ）まで 100 秒、いや、今はおそらくもっと近づいているでしょう。そして、私たちはかつてないほど相互につながっています。人びとの運命は、この地球上で完全に相互に結びついているのです。私が話したすべての課題、ウクライナと NATO、パンデミックの拡大とワクチンへ

のアクセス、米中関係、エネルギーシステムの脱炭素化、途上国が持続可能な開発目標を達成できるようにするための資金シフト、そして核軍縮の道の追求についてです。核不拡散条約の下で、我々は国際法で核軍縮を追求する義務を負っているのです。

### **欠けている協力の精神**

これらの協力分野はすべて実現可能で、手の届くところにあり、実用的で入手可能です。そればかりでなく、世界中で大金を節約できるため、その資源を人類にとって真に重要な目的に投入することができます。欠けているのは、世界的な協力の精神です。

アメリカの同盟システムは、平和のための制度ではありません。中国に対抗するクワッド（米日豪印）同盟を作ろうとしても、東アジアでの理解と協力につながる方策にはなりません。NATO の拡大は、世界の安全の軌道ではありません。私たちに必要なのは、国連憲章による安全です。世界人権宣言のもとで守られる相互尊重とすべての人権の安全が必要です。これらは、現時点で生き残るための方法です。NEARPS と広島大学が、平和のための努力をリードしてくれていることに感謝したいと思います。その秒針を押しするために力を合わせまし

よう。そして、この先、終末から数分離れ、数週間、数ヶ月、数年も離れましよう。本日はご一緒させていただき、ありがとうございました。この重要な会議を私は深く光栄に思っています、ありがとうございました。

(了)

【翻訳 田中 靖宏】